

先週私たちは、五旬節の日に聖霊が弟子たちに注がれるのを見ました。そして、聖霊に満たされた彼らが、他国のことばで神の大きなみわざを語ったのを見たわけです。それを聞いた人々は、当然、驚きました。それは人々をして、弟子たちの語ることばを理解できたからですが、なかには「甘いぶどう酒に酔っている」と言ってあざける者もいたのです。そんな人々に向かってペテロが代表して語っているのが、今日のところです。

14-15 節「そこで、ペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、人々にはっきりとこう言った。『ユダヤの人々、ならびにエルサレムに住むすべての人々。あなたがたに知っていただきたいことがあります。どうか、私のことばに耳を貸してください。15 今は朝の九時ですから、あなたがたの思っているようにこの人たちは酔っているのではありません』」。

朝の九時だからという理由で、「酔っている人が世界にひとりもない」と言うことはできません。それこそ朝から酔っている人もいることでしょう。でも、ペテロがそう言ったのには理由があります。つまり、ユダヤの人たちは、祭りの日には会堂へ行ってお祈りをするため、10 時以降でないと飲食はしないという習慣をもっていたのです。ですから、自分たちが酔っているということはあり得ないとペテロは主張しました。ということは、やっぱり彼らは聖霊によって他国のことばを語った。神様の大きなみわざをそこにいた人々のことばで語ったのです。そして、それはまさに聖霊によるみわざでした。

ペテロは、そのことを聖書から説明しています。16-21 節「これは、預言者ヨエルによって語られた事です。17 『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。18 その日、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。19 また、わたしは、上は天に不思議なわざを示し、下は地にしるしを示す。それは、血と火と立ち上る煙である。20 主の大いなる輝かしい日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる。21 しかし、主の名を呼ぶ者は、みな救われる』」。

ペテロは言います。「今あなたが聞きしいていることは、神様が預言者ヨエルを通して語っておられたこと（ヨエ 2:28-32）の成就である」と。つまり、神様は、終わりの日に、すべての人にご自分の霊を注ぐことを約束された。そして、聖霊を受ける者は預言する、神の大きなみわざとしての預言をすると言われたのです。

この「わたしは、上は天に不思議なわざを示し、下は地にしるしを示す。それは、血と火と立ち上る煙である」とは、世の終わりの時のしるしとして、世界的な戦争を指すと注解にありました。主ご自身もそのように語っておられる通りです。また「太陽はやみとなり、月は血に変わる」とは、主の再臨の時に起こる天体の異変のことです。ですから、もう一度言いますが、ペテロは、聖霊降臨の出来事を通して、終わりの日（その時代）が始まっていることをここで告げているのです。

では、主の預言の成就としての聖霊降臨は、どのようにして起こりましたか？大きな物音を聞いて集まってきた人々は、そこで弟子たちが他国のことばで語るのを聞いたわけですが、それはどのようにして起こったのでしょうか？もっといいうならば、果たして誰が弟子たちに聖霊を注いだのでしょうか？

33 節「ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです」。弟子たちに聖霊を注いだのは、神様の右に上げられた主イエスです。主が、父なる神様から約束された聖霊を受けることで、弟子たちに注がれました。では、どうですか？もしそうなんだったら、そこに集まった人々も、弟子たちと同様、主に聖霊を注いでもらったら良いのではないかと？そうしたら、彼らも預言する者となり、また主の名を呼ぶことで救われるんだから、すべてが上手くいくのではないかと思わないですか？「だから、聖霊を受けよ！」とペテロは言っていますか？

話がそう単純であれば良かったのですが、実際はもっと複雑です。というのも、そこに集まった人々は主イエスのことをそのような方としては見ていなかったからです。もちろん、彼らはナザレ人イエスが 50 日前にどうなったかを知っていました。ペテロが言うように、彼らこそ主を十字架につけて殺した人々でした。

ペテロはこう言っています。22-23 節「イスラエルの人々たち。このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行われました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のあかしをされたのです。これは、あなたがた自身をご承知のことです。23 あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました」。

また後ほど触れますが、ここでペテロは人々に向かって実に大胆に語っています。「あなたがたは…この方を、十字架につけて殺しました」と。その同じ人が、預言者ヨエルを通して神様が語っておられた聖霊を注ぐ方、人々をして救われるために呼ぶべきお方だということですから、それは「そうですか」と言って簡単に受け入れるものではなかったのです。たとえ彼らが直接、主に手をかけた者ではなかったにしろ、それを受け入れるのは容易なことではなかったと推測します。

でも、ペテロのことばはそこで終わりません。24 節「しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです」。ペテロは言います。「あなたがたは、この方を十字架につけて殺した。でも、神様はこの方をよみがえらせたのだ」と。これを聞いて、あなたなら、どう応答すると思いますか？「それは良かった。彼がよみがえったのなら、問題は解決されたんですね。では私も信じます」といって、ペテロのことばは素直に受け入れると思いますか？

「私ならそうします」という人は、おそらくいないことでしょう。弟子たちでさえ、主から直接聞いていたにも関わらず、主のことばを信じることができず、よみがえられた主を見るまでは、彼らは信じなかったのです。ですから、ペテロはそのことを聖書から引用して人々に伝えます。それまでしなかったキリストの光をもって預言のことばを解釈することによってです。しかも、ユダヤ人たちの尊敬するダビデ王のことばを彼は引用します。

25-28 節「ダビデはこの方について、こう言っています。『私はいつも、自分の目の前に主を見ていた。主は、私が動かされないように、私の右におられるからである。26 それゆえ、私の心は楽しみ、私の舌は大いに喜んだ。さらに私の肉体も望みの中に安らう。27 あなたは私のたましいをハデスに捨てて置かず、あなたの聖者が朽ち果てるのをお許しにならないからである。28 あなたは、私にいのちの道を知らせ、御顔を示して、私を喜びで満たしてください。』」（詩 16:8-11）

この「あなたは私のたましいをハデスに捨てて置かず、あなたの聖者が朽ち果てるのをお許しにならないから」という所に目を留めたいと思います。「ハデス」とは、墓のこと、つまり、死後の世界のことです。ですから、主は私のたましいを墓の中に捨てて置かれぬ、死につながれた状態に留まらせることはないと言っています。では、どうですか？ダビデは死ななかつたのですか？いや死んだとしても、その後すぐによみがえったのでしょうか？

29 節「兄弟たち。父祖ダビデについては、私はあなたがたに、確信をもって言うことができます。彼は死んで葬られ、その墓は今日まで私たちのところにあります」。ダビデはよみがえりましたか？いいえ。では、彼は誰を指してそう語ったのでしょうか？その続きを見ます。30-32 節「彼は預言者でしたから、神が彼の子孫のひとり彼を王位に着かせると誓って言われたことを知っていたのです。31 それで後のことを予見して、キリストの復活について、『彼はハデスに捨てて置かれず、その肉体は朽ち果てない』と語ったのです。32 神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です」。

ダビデは、神様がとこしえの王位を約束された彼の子孫（第二サム 7:12-13）を指して、このことを預言しました。つまり、その子孫こそ、主イエス・キリストです。人々は不法な者としての律法のない者、また外国人であるポンテオ・ピラトの手によってこの方を十字架につけて殺しました。しかし、神様は、この方を死の苦しみから解き放ち、よみがえらされたのです。そして、何よりも、ペテロを始め、弟子たちはそのよみがえられた主にお会いしました。40 日間に渡ってです。

そのよみがえられた主が、この書の初めで見たように、天の神様の右の座に昇って行かれることで、神様から約束の聖霊を受け、ご自分の弟子たちにその聖霊を注がれました。先ほど見た 33 節に記されている通りです。ペテロは続く 34-35 節でも、ダビデのことばを引用しています。「ダビデは天に上ったわけではありません。彼は自分でこう言っています。『主は私の主に言われた。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていなさい』」（詩 110:1）と。

この最初の「主」とは神様、そして「私の主」とはキリストのことです。つまり、このことは主が来られるまでの主の置かれた状況を伝えています。それは神様が主イエスの敵を彼の足台とする時まで、主は神様の右の座に着いておられ、この世に来られないということです。でも、その時が来たなら、主は速やかにこの世に戻って来られ、聖霊を受けて預言する者、ご自分の名を呼ぶすべての者を救われます。

ペテロは、そのようなお方として主イエスを証しました。そして、事実、主はそのようなお方です。先週も見ましたが、彼のメッセージの終わり方があまりにも強烈で、私の心にずっと響いています。36 節「ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです」。ペテロは言います。キリストを十字架につけたのは、「イスラエルのすべての人々（英語では “All the house of Israel”）」、つまり、「あなたがたです」と。

主イエスを十字架につけて殺したのは誰ですか？主を呪いとしてユダヤ人の嫌う木にかけて殺したのは誰ですか？ペテロは言います。「あなたがたである」と。その「すべての人々」の中に、ペテロは主を三度否んだ自分も含んでいたことでしょう。主を捨てて逃げてしまった他の弟子たちも含んでいたと思うのです。また何よりも、彼のメッセージを聞くすべての人が含まれていました。さらに時代や場所を超えて、今この時、聖書を通してこのメッセージを聞くすべての人が含まれていると思うのです。

そのことにあなたは「アーメン」ですか？それとも「自分に関係ない」と言われるのでしょうか？頭では一応、理解し、また口でも「そうです」と言いながら、でも実は、罪人としての本当の自分の姿にまだ気づいていないという人はいませんか？本当の意味で、罪人としての自覚が与えられるなら、私たちのうちには「そんな者のために主が十字架にかかって罪と滅びから贖い出して下さった。私はこの主の恵みによって救いを得た」という確信が必ず与えられます。主の名を呼ぶ者とは、そのような人ではないでしょうか。でも、それもわかれとってわかるものではありません。聖霊の成せるわざだからです。だから何もせず、その日をじっと待つのではなく、主の前に自分を低くし、みことばと祈りを通して聖霊の満たしを祈り求めようではありませんか。神様は、聖霊によって私たちの罪を示すとともに、いよいよキリストの栄光をわからせて下さいます。